第1章　ビルの安全性への手引き

ビルのデザインは犯罪や迷惑行為をコントロールするという重要な意味を含むことができる。伝統的に、ビルのデザインの安全性にはずっと夜盗防止という問題があった。しかしながら調査によると、この手引書を後々多く参考にしているのは、暗に見解が広がったことを示すものであろう。多数の犯罪や迷惑行為はビルのデザイン次第でコントロールできるのである。

Preventing crime

近年、高まる関心事は犯罪防止策を広めることの一つでもあるビルのデザインやその周りの環境を通して犯罪予防をしていくということである。ビルの特に住宅の安全性について良いデザイン法の指導は出版物において成されている。警察は「designing out crime」(Clarke and Mayhew, 1980)の中で建築の忠告をするようになった。
この考えは既に権威者たちが犯罪に対する新しい対策(Department of the environment, 1994)を協力しながら編み出し、広めている。
しかしながら、全ての人が犯罪防止に重要な意味があるその環境デザインを受け入れない。

多くの犯罪学者や社会学者たちは、社会や文化や経済の問題事に犯罪のルーツがあると指摘している。彼らは犯罪防止は教育、社会、経済方針の改善に担われていると主張している。犯罪防止への社会の近接は、若い人々がエネルギーの行く先を見つけることができるなど個々への策として間口を広げることにもなるのである。また警察や刑法システムにも信頼がおけるのである。

彼らは警察の勢力が向上し、罪を見つけ正義もたらし犯罪問題を解決することを信じているのである。犯罪防止の意味には厳しい判決と強い刑罰に暗黙の了解があるとされている。議論は猛威をふるい、違う所へと吹いている。

社会の秩序を浸透させようとする弁護人たちにより、自然科学だけでなくセオリーまでもが置き換えられてしまった。一部の周辺を変えるというこのセオリーは、犯罪の防止は出来ない。なぜならそれはただ他へ移動するだけで目標への攻防を減少させるのである。

同様に、警察を強勢としない議論と犯罪に対する施法の仕組みは増加する犯罪に効果的でなく、また犯罪によって形を変える厳しい処遇制度を打ち出している。広がる犯罪問題への解決策は多分内部の至る所にあるのである。そのいくつかは将来ある子供たちにまた、彼らをどのように礼儀正しくさせられるか努力する教育法に拒絶されるだろう。

同様に、いつも決まった犯罪に対しどちらか一方にターゲットを絞っているだけでなく、デザインの変更が犯罪防止策となることのデモンストレーションへの大きな証拠となり、そして犯罪行為の減少をもたらす。
(example are given in Clarke, 1992)

或いは、環境デザインは防止策になるだけでなく犯罪を合理的にリスクを負わせ罰を与えるだろう。これは、警察や刑法システムが目指すところであるに違いない。

コラム

［警察と刑法］＆［社会防止策］＆［環境デザイン］

「犯罪の防止策は社会防止策や警察の利用や刑法システムや環境デザインとが絡み合うことにかかっている。この背景には環境デザインには全てのデザインの現状と自然環境を左右することの意味を含んでいるからである。」

A new approach

ビルの安全のために慣習的に行われていることはドアや窓に、より強固な鍵を取りつけたり、より安全性を高めるためにﾊﾞｰやシャッターを取り付けたりしている。それ以外にありふれた安全装備はアラーム設備や近隣にTVモニターやライトを取りつけたりすることである。これらの全ては、自分たちのスペースに安全をもたらすのだろうが、安全性を高めるという考えからすると、明らかに問題のある環境をデザインするという更なる安全装備を付け加えるべきである。以下はこれに対する幾つかの理由である。

＜Aesthetic concerns＞

最初に安全装備により支配される環境についての美的感覚（Aesthetic concerns）である。

この例は閉店後のショッピング通りに広範囲にわたりシャッターを使用するという大儀な計画に異議があるのである。（Shop Front Security Campaigh, 1994）このような安全策は都市生活の質にダメージとなるだろう。

入口操作システムやアラームや防犯カメラなどのように自由に移動することやプライバシーを取り去るような方法がどんどん活用されるなど多くが喜ばしくないことである。これらの明白な安全策議論は犯罪の心配や個人の安全不安のレベルを上げている傾向にある。

侵入者探査装置やそれ以外の「ハードウェアー」までいかなくてもビルやその周辺を償うことができるということは根本的に安全でないということである。

＜Effectiveness of security measures＞

効果的でない多くの安全策について偽りもある。議論されていることであり、例えば通例となっている通りの灯りは犯罪率の低下につながるということであるが、ホームオフィスのリサーチではこれについての確固たる証拠が発見されている。（参照パート４の「Lighting and security」）

それ以外の問題は強固な安全策が力強い方法であればあるほど犯罪には有効であるということである。窓の鍵はガラスを割り開けると窓から普通に入ることができることを促す。

現在窓の鍵はますます当たり前になり、侵入方法は窓に立ち向かうことがより一般的であり簡単な道具が使われている。

荒荒しい方法でもっと劇的な例は、ramraidである。小売店舗にアラームシステムやドアやシャッターの補強やsome criminal have raised the stakesによる防犯が

広まっている。秘密の侵入方法を利用するかわりに、盗んだ車両で破壊しビルの中へと侵入し、警察が現場に到着する前に別の盗んだ車両で逃走できるのである。

玄関や建物の脇で、人はいつも親切な隣人でいることはできない、人は人間や天候の襲撃に対抗するため壁を補強しなければならない。

Alberti「The Ten Books of Architecture (1472)」

－the C16 rustication is by Sangallo

＜The cost of security technology＞

安全策についての問題点を付け加えると、コストの問題である。設備のコストもサポートやメンテナンスもコストが高い方がより洗練されているのである。侵入者探知アラームや監視カメラなど近代的な防犯システムは人間がバックアップする時にだけ十分に効果的なのである。これは絶え間ない警告発信で安全のための警察による早急な応答を要するだろう。これが不十分であるなら、フルタイムの個人的な防犯策も要せるのである。また、防犯システムが犯罪の襲撃でダメージを受けた時のコストは、盗難により失うものより修理代が超過するだろう。

＜Security through desigh＞

1970年代初期から関心が高まった犯罪に対する考えは、防犯技術を増やしていくより一般のビルのデザインをより効果的にしていくことができたのである。オスカー・ニューマンの有名な「defensible space（防衛スペース）」計画はリサーチャーたちに批評されたのであるが、住宅デザインに注意を傾けることは他のなにより防衛になるということである。（ニューマン，1973）

ニューマンは防衛スペースとは慎重にテリトリーを明確にし、それぞれの居住者たちにより見張ったり制御したりすることができる家の周りの石垣などのデザインをとおして成し遂げることができると指摘した。彼の業績は、

通りに面するビジネス用また住居用の建物に都市型環境の安全性を成すという多様化を重要視する初期の著作したJane・Jacobsに影響されていた。（Jacobs，1961）

環境デザイン（CPTED）を通し犯罪に対する考えが広まり、C Ray Jeffrey(1971)によって慣用句が集められ、1970年代にアメリカで著しく成長した。（Crowe，1991）

広まる犯罪には数多くの異なる形式があるのであるが、行動や動作を操作する形によって犯罪を左右するという本質的な狙いがあり、そしてビルの周りを居住者あるいはそれ以外の利用者と監視を張り巡らすのである。当然の結果としてこのようにビルの設計がされ、行動範囲には共通の監視あるいは防衛が張り巡らされるだろう。

これらの構想が1970年代に立ちあがって以来、デザインを通して犯罪を制御するという事に関心が高まりリサーチが続けられている。この努力の多くはずっと住宅に焦点が絞られている。（例えば、Poyner and Webb，1991）

ここにガイドを紹介した目的は犯罪や住居用でない環境における迷惑な行為を制御するという意味のデザインはリサーチと同一のガイダンスとの両方によってもたらすのであるということである。

コラム

パブリックビルは実用的でありシンボルであるという理由から伝統的で重厚感があり脅威的で近付きにくいのである。しかし現代の風潮はこの伝統的というのを拒絶している。

1830年代の美術館と1960年代の美術館を比較してみる。(Fitzwilliam美術館，ケンブリッジ，by Basevi，top，ナショナルギャラリー，ベルリン，by Mies van der Rohe)

コラム

都市の通りは通行人たちによって装備がなされ、通行人の行為しだいで安全性がでるのであり、３つの主な事がある。

１つはパブリックスペースとプライベートスペースとを明確に設定する。

２つめは通りを監視しており、監視は自然に

我々を通りの所有者としている。

３つめは，それを続けることで脇を歩く人が使用者である。

Jane Jacob「The Death and Life of Great American Cities」(1961)

The concept of inherent security

このガイドに働きかけることは、ビルのデザインに従来の安全性のコンセプトを享受するということである。従来の安全性は防犯装置やアラームシステムによってでなく、自然なレイアウトとドアや窓の位置、移動や行動範囲の操作によって成し遂げられるのである。

そしてそのままの状態を利用し一般的でない人間を監視するのである。既に扱われている全てのデザイン企画には建築上厳しい要素があり、従来の安全性でなく変わりに新しい要素をデザインの中に取り入れている。

安全性について新しく築かないことも含め、ありふれた要素を建築デザインで扱うことにより、防犯や使用者の満足を慎重に進めることを可能にするのである。

従来の安全性とは全てのビルに素晴らしい基本的な安全性をもたらすが、それ自体では高いリスクにより防犯をもたらすことなないだろう。価値があり重要な銀行や郵便局やいくつかの家屋には進められ或いは準備されている。しかしながら、適切な安全性と取引の手続きが成され一歩進んだ基本に基づいた素晴らしい従来の安全性をビルにデザインしようという提案がなされた。

<An economic solution to security>

この安全性への主なサポート面はコストである。従来の安全性のデザインは慣習的なデザインより安価でなければならず、かつ安全装備やサポートシステムが備わっていなければならない。さらに付け加えるなら、ビル所有者やテナントの人々がリーズナブルであると信用できるデザインの優れた従来の安全性は、安価で貧相なデザインを安全シ

ステムに取り替えなければならないのである。ビジネスとして犯罪のコスト面を主に指摘するならば、適切なコストを広めることである。

例えば、1992年から1993年の間、細分化された防犯費用の総額の19%にあたる370ミリオンポンド産業であると見積もられていた。(Burrows and Speed, 1994)
デザインの優れたビルは、この経費の負担を削減するべきであり、安全設備の必要なビルに変化を浸透させるべきである。

<Scope of inherent security>

この手引き書の編集目的は、デザインに表される犯罪の影響や迷惑行為との関係性中心の調査の再確認である。或いはいくつかの犯罪の解明をすることでもあり、詐欺のような事はビルのデザインしだいで影響を受けないのである。更に再確認を進歩させ、更にデザインを通して防御することができるいくつかの安全性の問題を解明するのである。付け加えて、ビルの外側のほとんどのデザインである外壁、窓、ドア、フェンス、スクリーン、ダウンライト、柱、ランドスケープ等は安全性をも保持するものなのである。Design for inherent securityは外側のレイアウトを利用したり、強奪犯から占有地や居住者を守るビルの構造のため自然環境を活用したりできるのである。これは全ての泥棒や暴動や損害に活用できる。この方法には、風、雨、暑さ、寒さ用に窓に沿ったシェルターデザインなど、人間の必要とする基本的な安全性やプライバシー、衛生、採光、静寂などを要するものなのである。

Inherent security in the desigh process

安全なデザインへの慣習的な考えは主だったドアや設計上の取り付け金具やアラーム、監視装置などに偏っており、デザイナーたちは、
「design concept is established」の基本に基づき、安全性を忘れ去っている。

しかしながら、従来の安全性のコンセプトは、デザインのコンセプトの核心に迫っており、デザインをする初めの段階に考えることに違いない。従来の安全性は基本デザインのコンセプトによって多くを決定し、後から付け加えることはできない。
進め方は、デザイン企画の中で安全性を分析できるように、大綱を型づくるのである。古い型の改築と進歩したデザインとを均等に近付けるのである。

<Identifying security risks>

この手引書の適用の仕方は、ビルのデザイナー達が挙げる様々なリスクを分類することである。それらはsecurity issuesとして表されている－その条件は安全性のリスクあるいは犯罪の問題の両方を制御できるデザインの中心に活用できる。
分類する最初の作業は、企画のために安全性のリスクの査定をすることである。
これ「master list of security」を実行するデザイナー達やその顧客たちに参考となることは、パート２の初め（22頁）に記載している。それはissuesに関連するであろう同一のチェックリストとなる。それぞれのissuesが提言する防犯方法を表すのをサポ

ートし、幾つかの明記した企画を推奨するデザインの中心となる。パート３はいくつかの普通型のビルについてのsecurity issuesのチェックリストとなり、サマリーは欠如している調査研究に関連する。

デザインを考案するのに必要な査定したリスクは、引用すべき幾つかの手段である。所有されているビルであったり、将来テナントが入るのが分かっているなら、これらの組織に経験があり、活動をリスクのデーターに応じて適応させられる独自のセキュリティーマネージャーを組み込ませるべきだろう。

顧客用のセキュリティーマネジャー達や或いはアドバイザー達は、スペシャリストとしてまず最初の通達方法を知るべきである。

もし周辺がビジネス街もしくは開発地であるなら、どのような経験に犯罪に関わる問題があるかを見つけるだろう。

これは公衆の場面において特殊で静かで浮浪者、野蛮人などのような行為である。

次の方法は地元の警官である。イギリスやウェールズの全ての警察は、建築や開発について幅広い助言ができるよう特別の訓練を受けている。彼らはArchitectural Liaison Officers或いはCrime Prevention Design Advisorsとして知られている。彼らの作業の一つは犯罪データの結果に基づいた特別なリスクをもつ知能犯罪を取り締まることである。

彼らは犯罪統計学に登場しない、パート２にも記載されない、またスポーツ施設周辺の人ごみや季節的問題である「new age」と呼ばれる一時的旅行者の整理など地元の問題にも対応するべきである。彼らのアドバイスは、デザイナー達やビルの所有者達に料金を請求しない。

２つの先見性のあるアドバイスは、保険屋でありプランナーである。保障についてまず最初のコンサルテーションは後々のデザインという分野やビルが賃貸者で埋め尽されてから高くつく安全策が必要となるだろう。

権力を企画することは、安全性を含み、最近のGovernment circularやPlanning out Crimeによる協力とともにポリシーを進展し始めることである。(Department of the Environment, 1994)

＜The design response＞

Security issuesにおいてパート２で記載しているガイダンスの目的は、どのようなデザインが最低でも、或いは分類された安全性のリスクを再確認することができるのか述べていることである。各セクションでは詳細にsecurity issueを解説し、防犯や迷惑行為に適用することができる方法を論じている。

自然なデザインは犯罪を制御するという意味だけでなく多くの安全性の問題がポリシーやデザインと絡みあうよう実施している。

それぞれのsecurity issueはデザイナー達や彼らの顧客達それぞれの特別な事情に対する最善法を決定するために心を開かせるような方法について書かれている。この方法だけがデザインの主体が適用させるべく明確にするのである。

この分野において現在知られていることは、デザインの主体が犯罪のリスクの再確認をすることを正確に広める可能性をなくしている。表されているような全ての簡易犯罪はその主体がデザインに取りこめられることで成功しデザインはより安全な環境を拡大させるだろう。

正確な方法による「risk management」や「risk assessment」の条件を活用することは普通のsecurity managementである。
その主な理由は安全性における金銭的なサポートである。これは従来の安全性について適切さにかける。なぜなら多くのデザインの主体は特別なコストがかからないからである。

例えば、事務所の窓から駐車場が見渡せるビルの企画をアレンジするのにCCTVの設備や監視システムや雇用者の安全を確保するための直接的コストなど、高いコストを含める必要がないのである。

しかしながら、risk assessmentはsecurityriskがscope of inherent securityにぞくすることの判断をより的確にするのである。
これは高いリスクを呼びおこすことになり、住居として確かであるか、専門家により安全性のアドバイスが必要になるであろう。

この手引き書の目的を付け加えるなら、全てのビルの安全性に詳細にガイダンスすることはないということである。これは主にデザイナー達や彼らの顧客達を助けるもので、彼らのビルの従来の安全性を拡大させるものである。人の住んでいないビルと分類されたものについて書かれているこれは、明らかに犯罪や迷惑行為の対象とされにくく、もしデザインの主体がパート２のように設定されていたら、そのようになるだろう。付け加えて、従来の安全性を心に留めデザインしたビル、安全策へのコスト、旧式に必要な安全性の問題を考慮することは大幅に減少するだろう。

デザイン法でないこと、一起こり得ることをいくつか実証するのにリスクなしで安全になること。全ての安全法のデザインの可能性が十分な法律の下にあること。

Building Research Station
Principles of Modern Building(1959)
Discussing structural design

Burrows, JandSpeed, M(1994)－Retail Crime Cost1992 93
Clarke, RvandMayhew, P(1980)－Designing out Crime
ClarkeRV(ed)(1992)－Situational Crime Prevention：Successful case studies
Crowe, TD(1991)－Crime prevention through Environmental Design
Department of the Environment(1994)－Planning out Crime
Jacobs、Jane(1961)－The Death and Life of Great American Cities
Jeffrey, Cray(1971)－Crime Prevention through Environmental－Design
Newman, Oscar(1973)
－Defensible Space：people and design in－The violent city

Poyner, BandWebb, B (1991) －Crime Free Housing
Shop Front Security Campaign (1994) －Shop Front Security Report

コラム

もし私がチェスの名人とチェスの対戦をするなら、彼はいつも勝つだろう。なぜなら明らかに彼は私の行動を予言し、私が逆転出来ないままなのである。心理学的な計画で私の行動をチェスの名人がコントロールできないよう注意すればいいのである。彼は私の環境を変えるようとシンプルに規定通りの動きをするのである。そしてその希望を可能になる。

つけ加えて、このことは、ほとんどいつもしている行動のコントロールなのである。

世界を変えることは、とても大変な作業であり、

世界にただ一人の個人を変えることは未知の提議なのである。